

「総体総合開会式の行い方を見直すべきです。」と、2月の体育主任会で申し出ました。教職員の働き方、生徒、保護者への負担、財政面。どの状況を見ても、時代に合わないと思いました。伝統的な総体に変化を求めることには勇気が必要でした。一喝されて終わることも覚悟していました。ところが、部長先生をはじめ、指導員のお二人とも、私の突然の申し出を真摯に、自分事として受け入れてくださりました。そこは俗にいう「体育会系」ではなく、「岡崎市体育部」として、主体的で対話的な、誇り高き組織が確かにありました。その後、先生方は、それぞれの立場で忙しい中、情報を集め整理し、伝統や先人たちの思いを大切にしながらも、総体のより良い行い方を追求し、各方面に掛け合ってくださいました。私は、先輩方の奔走されるその精一杯の姿に応えるべく、総体当番校体育主任として、生徒たちの達成感を目指し、全力を尽くそうと気持ちが高まりました。

63回の歴史を誇る総体の当番校であり、全21校の先頭を歩きます。本校の生徒は、岡崎市長をはじめ、多くの来賓の方からの注目を集め、岡崎の中学生の凄さの象徴として先頭に存在することになります。行進が始まり、先頭の陸上部員の左足のかかどが、ピタリと同じタイミングで大地を捉えた姿を見た瞬間、この行進は成功すると確信しました。ただ、ここに至るまでの道のりは、決して容易ではありませんでした。

### 「栄光の頂へ 令和とともに あゆみたくかに」

大会スローガンの「栄光の頂」とは、生徒、教師、総体に関わるすべての人々の、それぞれが掲げる願い・目標であります。陸上部顧問の私の栄光の頂は、「陸上総体優勝」よりも、「六ツ美中の生徒が、総合開会式を通して、たくさんの人に褒められること」とし、競技力よりも、単調で厳しい行進練習から逃げない精神力こそ価値があると生徒たちに伝えました。

しかし、なかなか高いレベルの行進はできませんでした。「どこまで頑張れる・・・。」「生徒たちは『やらされている』なのか、『やるしかない』なのか。」探りながらの指導が続き、結局、不安なまま激励会を迎えました。総体総合開会式で行進しない部にとっては、校内選手激励会が本番です。ただ、残念ながらそこでも、まだ高まりません。悔しいですが、激励会で賛辞を贈ることができませんでした。「君たちならまだできる。」とだけ伝えて、会を閉じました。

事態は突然、好転します。翌日の行進練習では、総合開会式で行進しないハンドボール部が、自主的に練習に参加してくれました。その他の部活もトラックを囲み、行進曲に合わせて手拍子でリズムをとります。クラブハウス前では、相変わらず応援団の全力の声が響きます。行進選手団の手と顔と志の高さは高いレベルを維持し、1歩1歩と歩みを進めることができました。私としては「救われた。」との思いがありました。ともに生きる仲間の支えのおかげで、行進選手団の心が「やるしかない」と変わり、行進の完成に向け、力強く前進したのです。

私の掲げた栄光の頂は、生徒たちの、仲間を思う自発的な行動から生まれた集中力により達成できました。教育長をはじめ、多くの先生方から、多大な賛辞を頂きました。中には、10mほど離れたところから、握手の手を差し出しながら私の所へ歩み寄ってくださる方もいました。きびきびした動き、最後まで手を抜かない姿勢、応援団の動きのまとまり、声の大きさ、表情など六ツ美中の生徒の頑張りを興奮気味に、とても高く評価して頂きました。先生方に褒めていただいた多くの言葉のひとつひとつを、六ツ美中の全校集会で生徒たちに紹介し、握手は、生徒・教職員の代表でさせてもらったことを伝えました。生徒たちは自己肯定感や達成感を味わうことができたと思います。



総体を終えて、自問自答が続きます。自分は、部長先生や指導員のお二人が、私の言い出したことに対して奔走されたように、目の前の生徒に対し、労を惜しまず、誠意をもって対応できているだろうか。また、たくさんの先生方がしてくださった力強い握手が、私に大きな達成感を与えてくれたように、自分は、目の前の子どもたちの頑張りを、力強い握手で讃えて、次の目標に向かうエネルギーを与えることができているのだろうか。

総体の総合開会式の行い方は、これからも岡崎市体育部として誇りをもって、より良い形を追求していけると確信しています。ただ、今思うことは、総体だけではなく、教育活動全般を通し、教師として、目の前の子どもたちに向かい合う姿勢をもっと高めなくてはと思っています。そこが私にとっての新たな栄光の頂であります。